

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	なかだち : 小説 : 文苑
Author(s)	白楊
Citation	龍南會雜誌, 124: 31-37
Issue date	1908-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6088
Right	

文苑

なかだち

白

楊

一

一昨年の中旬のこと。ある日自分は大川邊泰象といふ友達に誘はれて。午刻過ぎから近くの山に遊びに行つた。その頃自分は市中に住んでゐて。野原まで出るには随分骨が折れた。大川邊の家は丁度田舎口にあつたが。態々自分の宅まで誘ひに来てくれたのであつた。歩きながら二人は互に平素の無沙汰を謝し。職務の多忙なことなどを話し。今日出懸るのは幾週目だといふこと迄をも計算して見た。愈その日の行く先きを決定したのは二人の足が友の家に近づいた頃であつた。

『それでは萩山にしては如何た』と友は特更大きな聲で叫んだ。その時何處からとなく突然姿を現はして。嫣然に笑ひながら自分に挨拶をしたものがあつた。それは高安君子といふ大川邊の従姉妹にあたる人である。自分は大川邊と君子とに關して近頃新らしき事實を得て居る。然しそれは親友大川の邊爲に今暫時秘密にして置うと思ふ。

二

五月と言へば暖かい九州地方では。花といふ花はもう遠うに散り失せて了つて。世は香ばしき新

緑の時節を代る頃である。野に出で、見ると實に目も眩ゆい程であつた。初夏の日光は洪水のやうに野原一面に煌々と光を浴せ。畑の麥は白く見えるまで光り輝き。この間まで得あらぬ薫を放つて黄金のやうな波を打たせた菜花は、最早散り果てて了つて。暴風あがりの蒼桐が何ぞのやうに。千枝に分れた木のみが勢よささうな色合を示し。不圖脇を見るて。可愛な夏豆が。四角を莖に紫の蝶の形した花を幾個ともなく垂して。今は已が天下だといつた風に吹き誇つて居た。川邊の柳は黄がとつた若茅をふき出して。黒く淀んだ水の面に耐力なく領垂て居たが。空には尙風があると思へて綿をもちつた様な雲の群が。青い透徹つた大空を幾個ともなく飛び交はして。その合間から。雲雀の聲が鈴でも振り鳴らすやうに。遙かに地の上に落ちて來た。暫時してその聲が止んだかと思つたら。麥畑の上を驀地に飛び切つて。一羽の雲雀が麥の中に匿れた。

野原は今が一番暇な時と見える。この廣い畑に誰一人出て居るものもない。こゝの納屋の前に餌を索つて居た。鶏が。何するとも片羽擴げて牝鶏を追ひ。それも餘り興に乘らぬといつた風で。此度は更に一段高く首を擡げて。一聲高く空に鳴き放つと。遙か向うの水車からかすかに之に應じた。後は又しんどゝて元の寂寞に歸つた。人家は其所此所に散布つて居たが。この廣い平野に人が住んで居るか如何かも疑はれた位。只折々小屋に打臥して居る牛の聲のみがさもだるげに聞へた。

一本榎の下に懸つて居る石橋を渡つて。三人は畔道を進んだ。大川邊と自分とは四五間先きに歩いたが。山に着くまで大川邊が自分に話したことは。すべて女を中心とした問題のみであつた。詳しいことは臆へて居ないが。たゞ『男は弱いものだ。弱い女にでも負けるもの』といつた大川邊の

言葉が今にも尙記憶に残つて居る。その時自分益々自分が所信の誤謬ぬことを確めた。ふと振り返ると君さんの頬には日傘の裡の青地が映つて。物凄く程白く見えた。自分の視線と君さんの視線がばつたり行き遇つた刹那。さつと薔薇色がさして来て。頬の肉の崩れ落ちさうな笑が浮んだ。あの物を疑つたやうな。人に媚びるやうな。何だか嫉ましさうな目付。それから嬉しいうちな。耻しうな。氣輕るな笑ひ。これが戀する女の特色かと自分は熟々思つた。

路は水叉の所から谷川に沿つて上つて居る、清い淺瀬のあたりにば片か一面に生へて。その隙間くくを。小鮒か幾群となく春波を立てゝ遊いて居た。人の足音がするとそれに驚いて。一時にばつと散ばつた。向うの村の笹の葉が。風に揺られてカサカサとあり出す。生麤るやうな片の香がブーッと訪れて來た。村から鉢巻して一人の若者が裸馬に跨つて一敢に此方に驅けて來て。横の畑に渡した丸木橋の所から。突然水煙を立てゝ。流れの中に飛び込んだ。今迄ヒツヒツと囁くやうな音を立てゝ流れて居た細流は。ヒタヒタと大きな絞波を描いて。流れ去つた。就立てられた砂煙は。生暖かな空氣の中に。ムクムクと渦巻いて。汗浸みた顔を見かけて。追つて來た。三人は風土に寄り沿つて。手巾を嚙みながら急いだ。

村に入ると世間も何となく騒がしく。崩れかゝつた鳥居の前を通ると。拜殿にガヤ／＼騒いて居た守子どもか。路傍までバタバタ走つて來て。囁きながら我等を見送つた。赭土の濕つばいだら／＼坂を少し許り進んだら。右手の方に。大名の在宅らしい家が見えた。奇麗に摘みあげた生垣の上から。眞紅の袴の干してあるのも見えた。

『一寸待つてくれ給へ。少し用事があるから』といひ様大川邊と君さんはその内にはいつて行つた。自分は随分研究して。門札を讀んで見たが。大分年數が經つたものと見へ。一面に黒くあつて居て。墨の跡は全く見えなかつた。暫時すると奥の方から段々聲が近づいて。
『あの石のあたりにね。待つて居ますよ。あつてですよ』と君さんの聲が聞へた。

三

山に入つてからは二人とも自分には殆んど取り合はなかつた。それがいつて自分が一人で先きに進めば。その都度屹度呼び止めた。話でもあるかと待つて見たがさうでもなかつて。二人は只自分を追ひ超えてさきに行くばかりで。自分は始終無言で後から續くのみであつた。

低い薄暗い茂みの中には。まだ昨日の雨の名残があつて。下から透かして見ると。地面からは一体に陽炎が立ち昇つて居た。上に生い茂つた大木の隙間から洩れて来る日光に。燦爛と燦爛めきあから睡むさうに傾垂れて居た青銅色の權木か。今日醒めたといつた風で。咄吹あぐびでもするやうに。そろ／＼と動き出すと。鉛色した日蔭の權木も。一時にどつと吹き返されて。鍍板ごたんのやうな裏葉が薄暗き木立の間に翻つた。その刹那生暖かな風がブーッと訪れて來て。椎とか。檜とか。山毛櫨ヌナギサなどの大木が同時にカサ／＼と騒ぎ出した。さきの松山でギ／＼鳴いて居た松蟲もそれに驚かされて。パツパツ鳴きやんで了つた。今までかすかに聞へた。さる日蓮寺の題目の聲か。急に手近に聞へ。それに合はして打つ太鼓の調子も。山の脊を連つて遠くまで響いた。松傘を一つ二つ轉かして散り布いた乾反葉を吹きまくりながら。一陳の風が森の木立から。續いて畑の麥に移つたかと思ふ

と。今まで黙り込んで居た松蟲か。又一聲に鳴き出した。

大川邊と君さんは誰憚る所もない。

『あら。厭だわ。櫟つて』

『だから先きにた出』

といったやうな具合であつた。

徑幅は漸く狭くなつた。徑の兩側には。樺色の赤みかゝつて。寧ろ朱に近いやうな松の幹か。幾本もなく立ち聳へて。その上には。青茶色の葉か。手でも擴げたやうに。コバルト色の空に浮き出でる。何物か求めるやうな氣合を示して居た。下は一面に漣のやうな裏白で敷きつめられて。その間に。恰好の石がをもちこち散らばつて。遠くまですいて見えた。このあたりは。さきの椎山とは違つて。一體に日光が照り込んで。世間か何となく明々として。名も知れぬ小鳥か澤山群をあし。松の枝から枝に飛んで居た。時々訪れて来る嵐は。岸邊に打寄する怒濤のやうに。チーツといつては過ぎて行く。三時頃にもあると。松蟲も鳴かぬやうになり。山は一體に淋しくなつた。三人は頂上の大盤石に行つて休んだ。地方ではこの石を八幡石といつて居るか。何の意味とも分らぬ、十二疊敷位の大きさで。西南北の三面は。松で圍まれ。東は千刃の崖を以て。一帯の平野に臨んで居る。大川邊と君さんは。丁度石が崩れて。自然に長椅子ソレーヤのやうになつた所に。腰掛けて。樂いげに笑ひ囁いた。相抱きもした。接吻キスもした。自分はなるべくから二人の嬌態を見まいと務め。一人で八幡石の上につた衝立つて。遠く託麻の原を見渡した。

直ぐ下の山の麓から起つた畑は。青い葦で作つた蓆を延べた様に。遠くあるにつれて。形が狹ばまつて。色か濁つて。薄くなつて。果は遙か向うの地平線に棚引いて居る。霧の中に消れて不測に直ぐその霧の上からは。大阿蘇の連山がムタリと立ち聳へて。長い／＼煙を南の方に靡かせて居る。その麓の温泉が溢れて。銀のやうな白川がサネ／＼と霧の中から流れて居る。隣の石山には。櫛を倒にしたやうな麥畑が幾段も重り合つて。その上には。石材を採る爲に崩れた崖が。頂の松林から落つる瀧のやうに懸つて居る。さきに超へた椎山は。足下には。若々しい青葉がムタ／＼と羊の脊のやうに。幾重にも打重つて見えた。誰でも廣々とした景色を見ると。何となく。心地になるものであるが。その日は。特に自分は氣が塞いで。何だか重苦しい。苦々しいやうな思ひをして。一向氣が引き立たなかつた。

『見えました』と。君さんは振り返りながらいつた。そうして二人は。申し合はすたやうに。微かな笑みを浮べた。然し自分は。少からず疑念を起した。

『一體誰が来るのだらう』

四

今では輝さんと。毎日のやうに往來ゆき来もして居るが。その時は随分狼狽あはてなものだ。以前に輝さんと遇つたのは。大川邊の宅で加留多を採つた夜。前後只一回であつた。その時什麼あことがあつたか知らぬが。以後寄り合ふ度毎に。自分は輝さん／＼といつては。同志仲間で冷かされたものだ。そんな譯合あら。大川邊の宅に毎日のもの。自然自分は。遠慮するやうにあつて居た。それに二人が道

て誘つたのは。確かに輝さんであつたのだ

五

『もう歸ろじやないか』二人が歸らんとする素振もあいで。自分はとう／＼切り出した。

二人は返答もせず。内密の話でもあるやうに。立ち立つて。手を連ねながら。さも睦まじげに囁きつゝ。森の中に這入つて了つた。後に残つたのは僅か一面識しかない若い女。自分は全く當惑して了つた。さらばよし二人が歸つて来るまで。黙り込んで待つて居るか。それも氣の毒だ。それなら何といつたものだろう。こんなことを思ひ躁つて。ものゝ二十分も沈黙に打過ぎた。不圖脇を見ると。輝さんは俯うつむいて。白い手巾を目に當てゝ。泣いて居た。自分はこの姿を見ると。何ともいへぬ。苦しいやうな。悲しいやうな。情無いやうな感じがして。胸が一杯にあつた。然し自分のやうな氣の小さい者は。狼狽すると。却つて妙に心が落ち着いて來て。急に過去の慣はしや。考へを。打ち破ることの出來あいのものだ。自分は俄に。心細いやうな。恐しいやうな。氣持にあつて。一刻も早く。二人が歸つてくれゝばよいがと祈つて居た。日は段々と沈みかけた。

然し大川邊と君さんは。とう／＼歸つては來あかつた。

自分が思ひ切つて。『歸りましやう』といひ放つた。輝さんは。思ひ出したやうに。一時にバラ／＼と涙をこぼした。只簡單に『はあ』といった答。自分は豫め。覺悟はして居たものゝ。その時は。實際卒倒せんとした。そうして次の瞬時には。知らず／＼。輝さんの手を。握つて居たのに氣付いた。